

# 先輩が後輩を導く老年看護方法演習の相互学習効果

高野真由美<sup>1)</sup>

松本佳子<sup>1)</sup>

山之井麻衣<sup>1)</sup>

## 要旨

本研究は、全ての実習を終了した3年生が2年生の演習に参加し、援助方法をアドバイスするという試みから、学年相互間の学びを明らかにし今後の演習方法の示唆を得ることを目的とした。演習終了後に、2年生と、参加をした3年生を対象に、先行研究を参考に作成したアンケートを配布した。その結果、今回の演習での交流を通して教わる側の2年生は3年生より実践的な患者の捉え方の指導を受け、援助方法を学ぶことが出来たと考えられた。また、3年生を近い将来の自分自身のモデルとして捉えることができ、意欲や学習への動機付けの効果もあると考えられた。一方、3年生は教える側を通して、1年間の実習を振り返り、自己の成長を認識していた。これは、今後の自信に繋がっていく体験と思われた。以上より学年間で共に学び合う効果が確認できた。今後、さらに、3年生には2年生への助言の仕方などを指導し、これからも学年を超えた演習の機会を設けていけるよう検討をしていきたい。

キーワード：看護学生、実習経験、患者イメージ、自己成長、相互学習

## I はじめに

現在、臨床ではプリセプター制度を中心とした先輩による個別的な新人教育の行われている施設が多い。このプリセプター制度の効果としては、新人の教育指導と精神的支援によって職場への適応を促すことがあげられる。さらに、その指導を通してプリセプター看護師と、新人看護師が相互に成長することも期待されている。しかし、新人看護師が就業継続を困難に感じる理由のなかには、職場での先輩看護師との人間関係や、理不尽な指導や指導による威圧感が、退職を決意する要因としてある<sup>1)</sup>。一方、新人看護師に対し先輩看護師も、どう関わっていけば良いのかという悩みも聞かれる。このことから、臨床の場で、チームの一員としての関係を築きながら共に患者と関わっていくためには、学生時代より、先輩後輩の交流が大切であり、その交流を通じた教える立場、教わる立場から学び合う経験が必要ではないかと考えられる。

3年課程である本学では、講義や実習でタイトなカリキュラムのために、一部のサークルを中心とした課外活動や学校祭の行事以外は、先輩と後輩の交流が少ないように見受けられる。このような状況の

中、学年を超えた関わりの中で教えたり教わったりというような環境づくりが必要と思われる。

一般の大学においては、ピアエデュケーションとして教育システムの中に取り入れ、初年次教育におけるピアサポーターの果たす役割の効果が報告されている<sup>2)</sup>。立命館大学では、オリター（オリエンテーション・コーディネーター、オリエンテーション・コンダクターを略した同大学のオリジナルの言葉）によって、新入生が大学生活にスムーズに入れるように、教員と連携をしながら授業に参加し指導にあたっている。そこでは、新入生の支援効果だけでなく、オリター自身の成長の効果も報告されている<sup>3)</sup>。

この他にも、学生による学習支援として、大学院生による学部生への演習や実習の指導を教育補助業務するティーチング・アシスタント（TA）の制度がある。このTA制度は、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や、大学院生が将来教員・研究者になるための機会になることを目的としている<sup>4)</sup>。このことから大学教育全体として指導におけるきめ細かさや個性を重視している方向性がみてとれる<sup>前掲2)</sup>。

本学の老年看護方法の演習では、1クラス約40人に対して3人の教員が指導にあたっているが、担当学生の人数の多さから援助技術のきめ細かさや個別

1) 川崎市立看護短期大学

指導までできているとは言い難い。また、患者役の学生が、できるだけ患者の気持ちに近づいてみるように促し、説明をしても、まだ実習経験の少ない2年生では、患者のイメージが付きにくい。そのため、麻痺のある患者設定に対し、患者役の学生が看護師役の学生がやりやすいように協力をし、過度に動いてしまうなど演習に真剣さが欠けているように感じられることがある。

そこで、今回、患者イメージが困難である2年生に対し、全ての看護実習を終了した3年生が演習に入ることで、患者の状況を説明しながら援助方法のアドバイスをする演習を試みた。その演習での先輩後輩の交流を通した学年相互間の学びを明らかにし、今後の演習方法の示唆を得たいと考えた。

## II 研究目的

今後の老年看護方法の効果的な教育方法を検討する目的で、2年生の老年看護方法の演習に3年生が参加をし、援助方法のアドバイスをする演習効果を明らかにする。

## III 研究方法

1. **協力者**：本看護短期大学で3年生が演習に参加をすることの了解を得た2年生Bクラス37人と、ボランティアでアドバイザーとして参加をした3年生15人にアンケートを配布し、協力の得られた2年生31人（回収率84%）と3年生13人（回収率87%）を分析対象とした。

2. **調査票**：2年生には、3年生の助言が、3年生には、演習に参加をしたことが「とても良かった」～「とっても良くなかった」までの4段階に○を付けてもらった。その理由として、各学年が演習に参加をしたことで感じたことなどを中村、渡辺<sup>4)</sup>の先行研究を参考に作成した。この先行研究では、上級生が下級生の演習に入った試みの結果、感想や困ったこと、楽しかったことなどを含めた自由記載の内容を、質的に分析しカテゴリー化されている。そのカテゴリー化の中のサブカテゴリーを一部修正し、アンケートの選択肢として採択をし○をつけてもらった（複数回答可）。また、その他の理由については自由記載を求めた。演習の終了後に、アンケート調査を実施した。

3. **分析方法**：各選択肢の項目の単純集計をし、記載内容については、内容の類似性にもとづいてカテゴリー化を行った。

4. **演習方法**：演習は、事例の提示からアセスメント、看護問題の抽出、計画立案までの3コマ（6時間）を個人ワークとグループワークをし、その立案した計画にそって、清潔への援助（清拭、洗髪、足浴、口腔ケアなど）、排泄への援助（殿陰部洗浄を含む）のロールプレイを実施し評価修正することを目標とした。つまりこの演習では、援助の実施を行い、評価修正しながら対象の状態に合わせた援助を導きだしていくことをめざしている。そのため、患者役の学生には、援助中に感じたことを表情や言動で表現することを伝えた。

3年生には、排泄への援助（殿陰部洗浄を含む）への参加をお願いした。演習に参加をするにあたって、事前に提出されている2年生の各グループで立案した援助計画を配布し、教員と確認すべき援助場面の打ち合わせをした。2年生への関わり方として、まずは援助計画にそって実施してもらい、何故その方法なのか援助の意図と根拠を確認することで2年生の気づきを促すこと。特に、患者のイメージがつかない状況にあることを踏まえた援助の根拠についてのアドバイスをお願いした。そして、困ったことがある場合は、いつでも教員に声をかけることを伝えた。担当は、3年生1～2人で2年生1グループ（4～6人）を受け持った。また、老年看護学担当教員3人で3年生の指導場面とそれに対する2年生の様子を観察した。

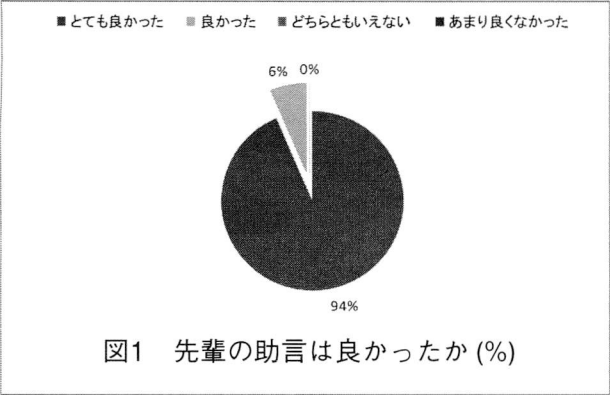
5. **倫理的配慮**：演習実施1ヶ月前に、3年生が演習に参加可能な時間割にある2年生のBクラス全員のグループに対して、3年生がアドバイザーとして演習に入ることの説明をして了解を得た。尚、その際、3年生が演習に入って欲しくない場合は教員が担当することを伝えた。

アンケート調査にあたっては、研究者より2年生Bクラス全員と、演習に参加をした3年生に目的を説明し、協力の有無が成績に影響しないこと、個人のデーターが外部にもれたり個人が特定されないように処理し論文、学会以外には使用しないことを説明し、同意を得られた学生のみを実施した。

## IV 結果

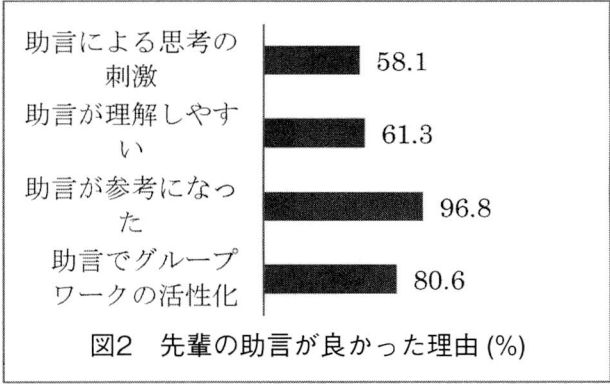
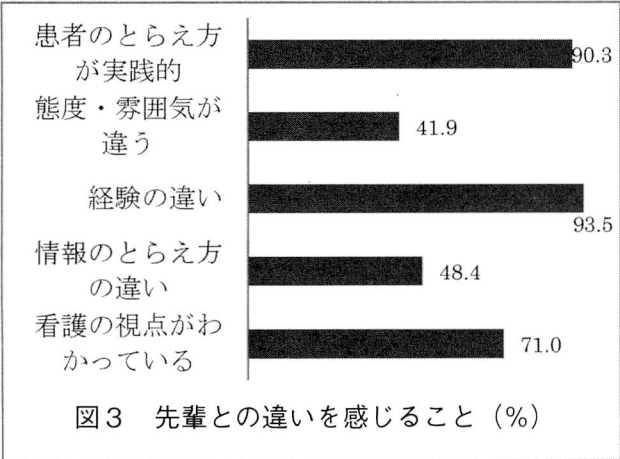
### 1. 2年生のアンケート結果

終了後のアンケートの結果、2年生は、演習での先輩の助言が「とても良かった」(93.5%)、「良かった」(6.5%)、「どちらともいえない」(0.0%)、「あまり良くなかった」(0.0%)と、肯定的評価が圧倒的に高かつ



た (図1)。その理由としては、「先輩の助言が参考になった」(96.8%)と最も高く、次いで「グループワークが活性化された」(80.6%)、「先輩の助言は理解しやすい」(61.3%)であった (図2)。また、先輩との違いを感じることは「経験の違い」(93.5%)、「患者の捉え方が実践的」(90.3%)、「看護の視点がわかっている」(71.0%) など、実践から得た臨床の知を感じたことへの意見が多かった (図3)。先輩が演習に入って感じたことに関しては、「良い演習方法と感じた」(71.0%)、「先輩のようになりたい」(48.4%)、「先輩と交流ができた」(48.4%)、「教員より身近に感じた」(45.2%) と答えていた。しかし、その一方で、「緊張した」(38.7%) と答えた学生もいた (図4)。

自由記載の内容をまとめたところ、先輩のアドバイスが良かったという内容が14件、具体的な患者のイメージがついたという内容が6件、先輩にほめられたことでやる気や自信に繋がったことに関する内容が4件、先輩が目標が3件、演習への期待が2件、先輩との交流がよかったが2件と、全て肯定的な意

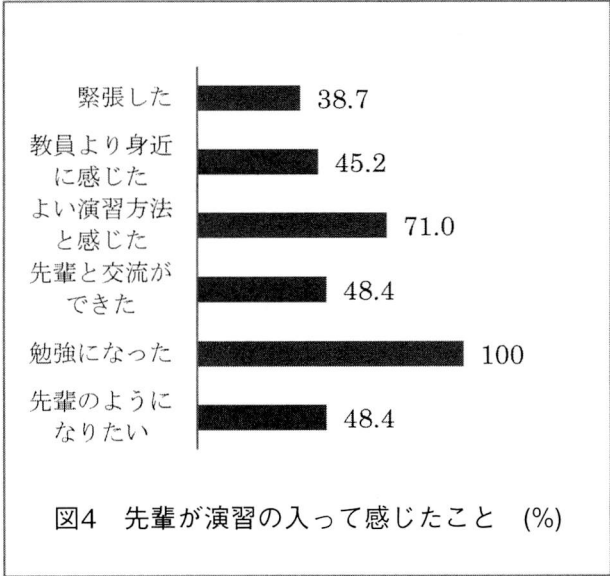


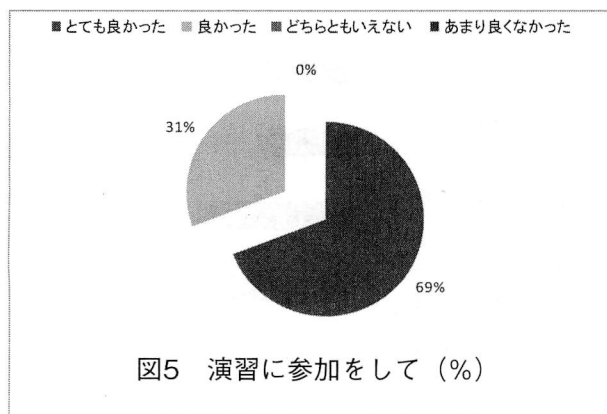
見であった (表1)。

## 2. 3年生のアンケート結果

3年生については、演習に参加をして「とても良かった」(69.2%)、「良かった」(30.8%)、「どちらともいえない」(0.0%)、「あまり良くなかった」(0.0%)であった (図5)。その理由は「自分の成長を認識できた」(84.6%)、「実習を通して学んでいたのだとわかった」(61.5%) と実習を通して自己成長を認識できたことに関する理由であった (図6)。演習の楽しかった理由としては、「後輩との交流ができた」(69.2%)、「後輩と一緒にワークができた」(61.5%)、「自分の助言が役立った」(53.8%) をあげていた (図7)。また、困ったことで多かったことは、「どこで、どのようにしていいか助言のタイミング」(53.8%) であった (図8)。

これに関連して、自由記載のその他の分類で1件ではあるが、「2年生なので、どこまで出来ることを求めて良いか困った (妥協点はどこか)」と言う指導上の難しさを記載している意見があった。た



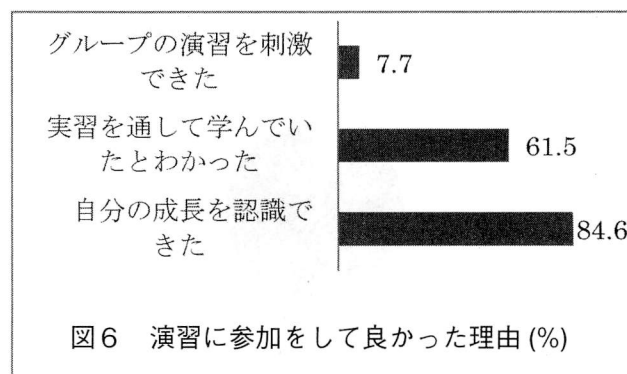


だし、後輩からの質問への対応などで困ったのは15.4%と低かった(図8)。他の自由記載の内容で最も多かったのは、演習に参加をして良かった理由と同様に、自分が成長できたことの認識に関するものが9件あった。ついで、自分自身の学習になっているという意見が4件あった。さらに、後輩の演習への取り組む姿勢への関心も4件あり、その内容には積極的に演習をしている後輩に感動したと答える一方で、後輩の態度や、服装、身だしなみなどが気になるなどのやや厳しい意見もあった(表2)。

### 3. 教員による演習の観察をしての気づき

3年生が、演習開始10分前に身だしなみをきっちりと整えて集合し、緊張感をもって2年生を迎えていた。演習では、両学年とも適度な緊張感の中、主体的に活き活きと真剣に取り組み、通常の演習時の雰囲気とは明らかに違う活気があった。

3年生は、2年生の援助場面を温かく見守り、アドバイスでは「看護師役の方は、患者さんへの声かけがとてもよかった」「でもね、声をかけても患者さ

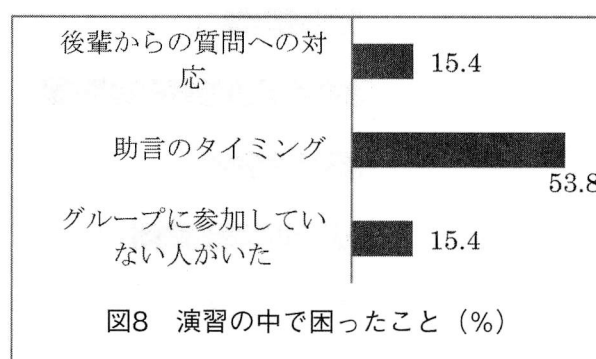
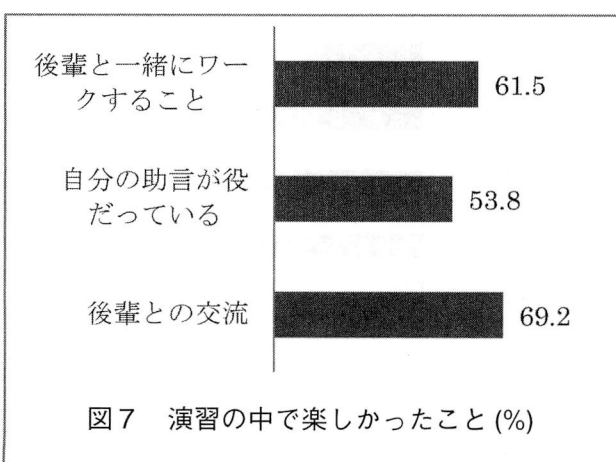


んは、それができないと辛いんだよ……」と、まずは、後輩の実施を認めて褒めてから、患者の状況を伝えるようにアドバイスをする姿勢があった。また、2年生は3年生へ積極的に麻痺のある患者の状態についての質問や、具体的な援助方法のアドバイスを求め、3年生はそのことに、堂々と対応をしていた。

## V 考察

### 1. 先輩が後輩を導く相互学習の効果について

2年生の学びとしては、先輩との違いを「患者の捉え方が実践的」と9割以上も答えていた。これは、患者のイメージがつかない2年生が、3年生の指導を受け、「この患者さんはここまで出来るけど、たぶんこれはできない」等と、具体的な身体状況についてまで教えてもらっていた。その結果「実際に援助を行ってきた先輩の話で、患者像など現実味があった」との記述から、より実践的な患者の捉え方や、援助方法を学ぶことができたといえる。さらに、ほとんどの2年生が、先輩の助言が参考になり、グループワークが活性化されたと答えている。その理由は、



「アドバイスの的確さ」や、「グループ内では出なかった意見や方法をアドバイスしてくれた」という記述から伺える。つまり、どのように患者の情報を捉え、知識を活用し、援助を考えていけばよいのかなどを方向付けてもらった結果であり、2年生にとって大きな学びとなったと考えられる。

一方、3年生は教える側を通して、実習から学んでいたという気づきや、自分の成長を認識できたと答えている。これは、2年生との比較や、助言をすることができるようになった事実から、自己の成長を客観的に振り返って実感を伴い認識している。それは、今後の自信へと繋がっていく体験であったのではないと思われる。また、助言など教えるためには、自分自身がきちんと学習をする必要があるといった気づきの記載がある。さらに、2年生の色々な方法をみて、教える側の3年生が後輩から学びを得ている状況もある。岩本らは、臨床の場において新人から先輩看護師が学ぶことについて、「お互い学び合う関係性に気づき、継続学習の必要性を感じたことで自己の生涯学習の出発点となったと考える」と述べている<sup>6)</sup>。つまり、教え教えられる相互作用によって、お互いに主体的に学ぶことの大切さを認識することができたのではないかといえる。

その他に、少ない意見ではあったが、2年生への助言でどこまで求めていいか困ったという意見があった。事前に打合せはしていたが、初めての演習で指導的な関わりの経験のない3年生には、2年生の学習状況を把握した助言は難しいこともあったと思われる。今後は、事前の打合せで2年生の立案した各グループの援助計画を見ながら、3年生と一緒に助言内容の検討をしていくことが課題と考えられる。

## 2. 先輩がモデルとなることからの学び

2年生の約半数は、「先輩のようにになりたい」と答え、自由記述の中にも「先輩のようになるために頑張ろう」と、答えた意見があった。2年生にとって3年生は、身近な目標であり、自分自身の努力によって到達可能な具体的存在として捉えることができる。また、理想とする身近な役割モデルとしても、3年生を捉えている。

臨床の場において、先輩看護師のプリセプターは、一番身近な役割モデルとして新人看護師に接し、ストレスの緩和や仕事への満足感に影響を及ぼすことを述べている<sup>7)</sup>。また、新人看護師の職務満足には理想とする看護師の存在が影響を与えることもいわれている。

つまり、今回、2年生が、臨床での実習経験のある3年生の存在を、目標や理想とする役割モデルとしてみることは、演習を通して感じるこれまでの学びの達成感や満足感と、これからの看護実習へ前向きに取り組むための意欲への動機付けの効果となることが示唆される。

## 3. 体験から得た人を育てることの学び

教員が演習を観察している中で、3年生は2年生の援助に対して、まずは認めるような言葉かけをしてから、肯定的に受け止め、できているところを承認しつつ褒めるといったポジティブフィードバックをする行動がみられた。このような指導に対し2年生は、「演習で3年生にほめられることでやる気がでて、自信につながった」という意見がみられた。

3年生は、これまでの臨床実習において、様々な指導を受ける体験を得てきている。その体験から、どのような声かけが感情的な支援となり、自信を持たせ、やる気を促進させるのかということを感じていたのではなかろうか。それが、今回教える立場になった時に、2年生を肯定的に受け止め、褒めるといった指導につながったのではないかと思われる。そして、その指導は、個としての存在に関心を向けて認める、相手への自尊感情を大切にしたい関わりであり、人を育てるための基本となる要素を踏まえた関わりであったと考えられる。

井部は<sup>8)</sup>は、新卒者が認知する自分たちの成長や変化に影響を及ぼした要因を「先輩からの保障」としており、新卒者が不明な点を安心して聞ける先輩との関係性や実践を正しく導ける先輩の存在の重要性を述べている。すなわち、今回の演習で、2年生が3年生を教員より身近に感じたという意見があった。身近に感じる3年生に、安心してわからないことや、疑問点を積極的に聞くことができ、3年生はそれを受け止めながらアドバイスし一緒に考えていた。このことが、「先輩からの保障」であり、相互の関係性が築かれたことから、積極的な演習となり2年生の学びに影響を与えたのではないかと考えられる。

## 4. 学生が主体となる授業づくり

今回、3年生が演習に参加をするにあたっては、教員より2年生に対しての具体的な細かい指導方法までは指示しなかった。それに関わらず、3年生はその場の状況に応じて、自分たちの視点で考えて判断をした方法を用いて指導し、落ち着いた態度で堂々とアドバイスをしていた。その学びの場を作り

上げていく力は、将来的には教育的関わりのできる看護師としての可能性が示唆された。それに対する2年生は、自分たちの目標となる身近な先輩が演習に参加をし、その先輩からアドバイスを受けることによって、自分たちの力で主体的に生き活きと演習を進めることができたと考えられる。

藤岡<sup>3)</sup>は、大学教育の改革論議として、学生が「教育サービスの受け身の消費者」という意識から、学生が大学づくりに能動的に参画する、「大学づくりの主体的な担い手」「授業づくりの共同参画」「大学創造の協働者」に変えることの意義について述べている。

日頃、教員からの受け身的な学びの多い中、今回の演習は学生一人一人が主体的に行動し学び合いながら、自分たちで演習を創りあげていったといえる。すなわち、学生それぞれが授業や演習に能動的に参加するためには、学生の視点を組み込んだ教育内容が必要であり、そのことから学生自身が主体的な学びの場を創りあげることになるのではないかと考えられる。そして、学生の視点を教育内容に組みこむための方法としては、学年間の交流を通して先輩が後輩を導く相互学習の授業や演習が有効と思われる。今後も、できるだけ、講義や演習、実習とタイトな時間割を調整し、2年生全クラスと多くの3年生が参加できるようにすることが必要である。

## VI 結論

今回、3年生が2年生の演習に入り指導を通して、以下の通りに演習の効果を確認すること

ができた。

1. 2年生は、3年生から実践的な患者の捉え方を学び、3年生は指導することを通して、自己の成長を客観的に認識することができている。
2. 2年生が、3年生を身近な目標、役割モデルとして捉えることで、今後の学習意欲の動機付けに影響を与えられる。
3. 3年生からポジティブフィードバックの指導を受けることで、2年生は自信を持ち意欲的に取り組むことができた。
4. 教育場面での指導経験のない3年生は、2年生の状況がわからず、助言に困ったという意見があった。そのことから、事前の打合せで一緒に援助計画を検討する必要がある。
5. 学年間の交流を通して先輩が後輩を導く相互学習は、学生が主体となり授業を創り上げていくことに繋がる。

## VII おわりに

今回の演習での交流を通して、先輩が後輩を導く相互学習から共に学び合うことの大切さをあらためて理解することができた。今後、さらに、3年生には2年生への助言の仕方などの指導を課題として、これからも学年を超えた演習の機会を設けていけるよう検討をしていく必要がある。

そして、将来的に臨床の場に出た時に、教え教えられる関係の中で、学ぶ姿勢や後輩に安心感を与えて人を育てることの大切さを想起し、チームの一員としての協働できる看護師になることを願いたい。

## 引用文献

- 1) 高橋久美他. 新人看護職員の早期離職に影響する因子－大変だけど頑張ろうと思う者と大変だから辞めたいと思う者の「悩みやつまづき」の内容を分析する－. 第9回神奈川県看護学会集録. 2006, p.88-89.
- 2) 細川和仁. 初年次教育における学習ピアサポート活動. 秋田大学教養基礎教育研究年報. 2008, p.1-9.
- 3) 藤岡惇. 先輩が後輩を導く相互学習のしくみ－立命館大学の「オリター制度」の経験－. 高等教育ジャーナル－高等教育と生涯学習－. no.10, 2002, p.127-131.
- 4) 北野秋男. 日本のティーチング・アシスタント制度－大学教育の改善と人的資源の活用－. 東信堂, 2006.
- 5) 中村博文, 渡辺尚子. 上級生が下級生のグループワークに入る演習方法の試み. 精神看護学. Vol.132, no.9, 2009, p.52-57.
- 6) 岩本恵美. 先輩看護師へ体位変換実技指導を行った新人看護師の認識. 第39回日本看護学会論文集－看護管理－. 2008, p.39-41.
- 7) 別所千恵他. 新人看護師の職場適応を促すプリセプターの役割. 第34回日本看護学会論文集－看護教育－. 2003, p.133-135.
- 8) 井部俊子. 看護教育における卒後臨床研修のあり方に関する研究. 厚生省科学研究. 1998.

表1 2年生自由記載のまとめ

患者のイメージがついた (6件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私達は実際の患者さんとふれ合う機会が少なく、患者を思い描くことが出来ないのだが、3年生はそれが出来ていて勉強になった</li> <li>・患者さんのイメージがつかなかったけど、実習をやってきた先輩は『この患者さんはここまで出来るけど、たぶんこれは出来ない』と教えてくれたので、イメージが少しついた</li> <li>・もっと、本当の患者さんだったら・・・ということをイメージして考えて行わなければいけないのだと改めて感じた</li> <li>・私達は資料を写したりするだけで、患者のイメージがなく、内容を理解せずに行おうとしていたので、それでは全くスムーズにいかないことが分かった</li> <li>・実際に援助を行った人の話で、患者像など現実味があったから</li> <li>・患者は頭で考えていることと違う所がいっぱいあった</li> </ul>
アドバイ스가よかった (14件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えなかったアイディアを言ってもらえたから</li> <li>・自分の気づくことが出来ない事を教えてもらうことが出来たため</li> <li>・知らなかった援助方法や知識を知ることが出来た</li> <li>・グループ内で出なかった意見や方法をアドバイスしてくれたから</li> <li>・アドバイスの的確で、すごいと思った</li> <li>・アドバイスも適切でとても良かった</li> <li>・アドバイスももらえて、とても参考になった</li> <li>・質問しやすくて、とても参考になる助言が多かった</li> <li>・すごく緊張したけど、細かい所まで見ていただいた</li> <li>・すごくためになった</li> <li>・先輩の意見を聞いてすごく参考になった</li> <li>・なぜそのような方法が良くないのか・良いのかを根拠をしっかりと説明してくれた</li> <li>・言っていることが分かりやすくて、先生に指導を受けているようだった</li> <li>・自分には全くなかった考えや、迷っていた事など、わかりやすく丁寧に伝えてもらった</li> </ul>
ほめられることによるやる気と自信 (4件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほめられてやる気も出だし、自分のケアの反省点もしっかり見直し、改善していこうと思った</li> <li>・出来ていた所はほめてもらい、やる気と自信が出た</li> <li>・ほめられた事によって、やる気が出た</li> <li>・やっぱりほめられると嬉しかった</li> </ul>
先輩が目標 (3件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分もあと1年で先輩のようにになれるか不安だったけれど、先輩のようにになりたい気持ちの方が大きくて、頑張ろうと思った</li> <li>・1年違うだけで、こんなにも違うのかと思った。私も先輩のようにになりたい</li> <li>・私も先輩のようにになれるのか心配だけど、頑張りたい</li> </ul>
演習への期待 (2件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・先輩の介入をもっと多く取り入れた方が良いと感じた</li> <li>・刺激を受けたので、たまに行えろと思う</li> </ul>
先輩との交流 (2件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習の他にも、3年生の実習の生活についても聞いて良かった</li> <li>・先輩の経験の話を聞いて、とても良かった</li> </ul>

表2 3年生自由記載のまとめ

自分の成長に関する認識 (9件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分はこのタイミングでこうしていたな～、ああしていたな、こうゆう失敗や成功があったな等と振り返る機会となり成長を感じ良い助言ができたと思う</li> <li>・実際に助言することで自分の成長が良くわかった</li> <li>・2年生の時は気づかなかったようなこともアドバイスできるほど成長したから</li> <li>・実習で実施したことが演習で活かせるほどになった自分がわかった</li> <li>・分かりやすくイメージしやすい言葉を選んで、聞いたり考えたりしてもらえるように伝えられる自分の成長を感じたと思うから 他</li> </ul>
自分の学習にもなった (4件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・高学年の人が下の学年に教えたりアドバイスをするためには、自分自身も勉強になるので、とても良い学習方法だと思う</li> <li>・2年生と交流出来たり、色々な方法を見れて、お互いに学べたと思った他</li> </ul>
先輩の取り組み姿勢への関心 (4件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・先輩が積極的に演習を行っていることに感動した他</li> </ul>
その他 (2件)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・このような機会があれば良いと思う</li> <li>・2年生なのでどこまで出来ることを求めて良いか困った (妥協点はどこか)</li> </ul>